

〈論文〉

新会蔡李佛に関する一考察

張 偉 雄

一、蔡李佛について

2008年6月8日、広東新会を発祥地とする、中国武術、南拳の一種「蔡李佛」が中国の国務院により国家級「文化遺産」として登録された^①。蔡李佛は南拳の諸拳種の中で始めて文化遺産として登録されたのである。

中国武術には大別して北派と南派に分類することができるが、北派は外家拳、内家拳に分けられ、「外家拳」には、「少林拳、查拳、翻子拳、八極拳、螳螂拳（螳螂拳）、鷹爪拳（鷹爪翻子拳）」などがあり、「内家拳」には、「太極拳、八卦掌、形意拳、六合八法拳」などがある。南派は南拳とも言う。北派武術に対して、南拳には、「洪家拳、詠春拳、蔡莫拳、白鶴拳、蔡李佛拳」などがある。

南拳の主な地域は福建省、広東省である。福建南拳は「短橋狭馬」が特徴であり、橋は手技で、馬は歩形である。「短橋狭馬」はつまり腕を短く捌き、足では狭い歩幅で立つというものである。それに対比して広東南拳は「長橋大馬」と言われ、歩幅を広く取り腕を長く使うものである。蔡李佛はまさにこの広東南拳の特徴を十分に現している武術である^②。

蔡李佛は1836年に陳享という方によって創出された武術である。百数十年の歴史を辿って蔡李佛はいま世界中に広がって、数多くの国や地域に蔡李佛関連の施設や会館などがあり、弟子は300万人がいると言われている^③。海外に多くの蔡李佛会館があり、弟子が多いということは、また華僑の故郷としての広東地域の武術の特色でもある。これは広東出身の華僑のある習慣に起因すると考えられる。つまり、多くの広東人が故郷を出ていく前に、修身の業の一つとして功夫の修業を行うのである。これによって強靱な精神と肉体を鍛え、過酷な環境にも生きていけるようにすること、同時にまた修業を通してよい人間関係を作り人脈を持つということにもなる。そして、海外に渡ってから、これが立身の術

として有効に起用してくれるのである。異郷においては自ら修練した功夫と同じ流派の武術グループを尋ね、そこに身を寄せる。そこはこういった同胞の日常生活を支える一つの society として機能しているのである。これは南拳の広がり方の一つの特徴でもある。

蔡李佛の創始者陳享（1806-1875）は、広東省新会崖門鎮京梅村の生れである。陳享は7歳から叔父の陳遠護に師事し洪家拳と佛家拳を修得した。1823年17歳になった陳享は「師父」（父のように敬愛する師）である陳遠護の紹介で李友山（李家拳の創始者）の門下に入り、四年間そのもとで李家拳の修練を重ねた。その後また広東羅浮山の蔡福に更なる教授を仰ぎ、内家功夫を修得した。こういった修行を重ねて後新会に戻り、清朝道光16（1836）年に、三人の師父の恩恵を忘れないように、師父たちの長所を生かし、その名を冠した独自の功夫武術の流派「蔡李佛」を創出した。そして故郷の京梅村の「縁福陳公祠」に洪聖武館を設置した^④。

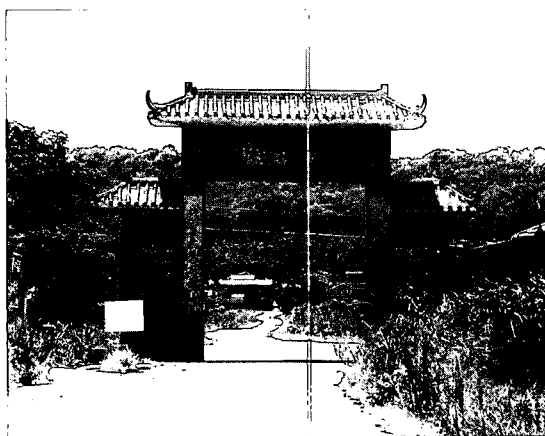


写真1 蔡李佛創始人陳享の故郷新会崖門鎮京梅村



写真2 京梅村にある蔡李佛洪聖始祖館

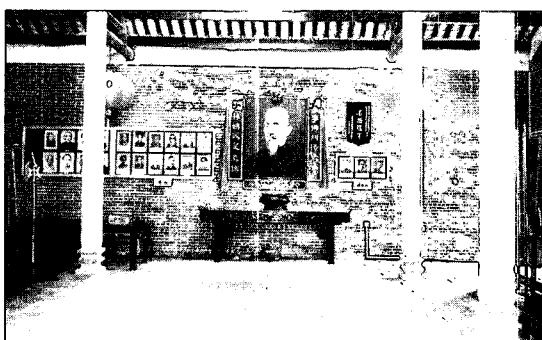


写真3 蔡李佛洪聖始祖館内部

二、新会蔡李佛最近30年の動向

新会地域は南中国の中でも歴史上海外と接点の多い地域である。そこは「僑郷」（華僑の故郷）「四邑」（開平，恩平，台山，新会）の中の一つの県であった。海外に渡り、住み着いた華僑とともに蔡李佛も海外に伝わっていった。蔡李佛は海外に渡った華僑にとって故郷にいたときよりも、実にもっと多くの社会的功用をもつようになっていたので、海外においては、修練する人口も多かったのである。これは実に広東華僑文化の重要な一側面を示しているものでもある（これについて別稿に委ねる）。

20世紀70年代まで、新会蔡李佛は国内よりも海外に繁盛を見せていた。50年代から70年代にかけて中国国内においては政治的な要因で武術活動は低迷期に陥っていたのである。80年代に入ってからやっと再度活発になった。80年代から今日までの大まかな動きを以下に把握しておきたい^⑤。

1980年、蔡李佛創始者陳享の故郷である「京梅村」において「蔡李佛武館」が再開された。会館教頭として、蔡李佛の直系門人である陳富燕，陳燕洛，陳炳美などが務めていた。京梅村では100名近くの青年たちが公式な蔡李佛稽古を始め、海外からも多くの蔡李佛弟子が訪れるようになった。四年間で新会県にはすでに千人を超えた人々が蔡李佛を修練するようになった。

1984年旧暦正月「春節」に、新会蔡李佛は新会市内に「春節獅子舞パレードおよび演武」を行った。これは新会において戦後最大規模の蔡李佛行事であった。同年、広東省において「広東省蔡李佛拳総会」が設立された^⑥。

1986年、新会京梅村蔡李佛始祖館新館を建て、会館名は「京梅雄勝始祖館」という名称を継承した。しかしその後青少年の都会移住や余暇の過ごし方の変化、学校での受験対応式教育などの影響により、蔡李佛学習人口が減る一方であった。

90年代に入り、1996年に「広州市武術協会蔡李佛拳会」が成立した^⑦。1999年有志の方々の呼びかけにより、新会蔡李佛振興の動きが出始めた。陳忠傑をはじめとする25名の蔡李佛愛好者は「民間の伝統的武術を発掘、継承し、市民の健康促進運動に参加して、新会の文化活動に寄与する」という方針を立てて、新会市内において非営利民間体育団体という形で「新会蔡李佛雄勝始祖記念会」という名称で活動を展開した。同年の5月4日に開会準備式を行い、陳忠傑が準備会会長兼総教頭を務めた。

2000年に入ってからオーストラリア在住の始祖陳享の第五代孫陳永發先生と連携して国際的な蔡李佛武術文化交流活動を展開することを模索しはじめた。翌2001年11月陳永發先生の引率でオーストラリアをはじめとして海外14の国地域96名の外国弟子が新会に集まり蔡李佛ルーツ探しと武術研修を行った。12月9日旧来「始祖館」が位置していた「縁福陳公祠」の修繕が終わり、始祖館がそこに戻って、会館名を最初の名称である「京梅洪聖始祖館」に戻した。

2002年に中国商工総局に蔡李佛に関する特許申請を申し出た。それは教育訓練、競技試合、映像出版などに関するものであった。この年の11月29日から12月9日「第二回蔡李佛同門国際大会」が開催され海外から16の国家地域83名の同門が集まり、会議期間2千名を超えた方々が各種のイベントに参加した。

2003年には「新会蔡李佛始祖拳会」という名称で、正式に民間体育団体として新会区民政局の批准を得て登録できた。この会の日常的な運営は理事会という形で行い、中には秘書部、財務部、訓練部、開拓部、武術醒獅隊などの部門を設置した。2003年10月に新会蔡李佛始祖拳会は北京の「全国第二回精武杯武術大会」に参加し、一等賞5個、二等賞6個を勝ち取った。



写真4 江門市新会区銀花街29号に設置してある「蔡李佛始祖拳会理事会」



写真5 蔡李佛始祖拳会会長陳忠傑氏（右2）及び理事の皆さん

2005年には広東省の観光文化祭に合わせて『江門の武』というテーマで蔡李佛の武術文化を披露した。続いて2006年には「陳享誕生200年及び蔡李佛創立170年記念大会」を開催し、内外の同仁が集まり盛大な交流ができた。この大会において、「蔡李佛泰斗」という称号を創り、蔡李佛の権威的な存在の方々18名に称号を与えた^⑧。

最近の動きとしては、2008年12月5日から8日にかけて、「蔡李佛中国非物質文化遺産登録成功祝賀及び広東第一回蔡李佛武術（国際）精英賽」という蔡李佛の国際大会を挙行し、国内外から500名の代表が参加する盛会となった^⑨。

三、蔡李佛の現在の展開

「新会蔡李佛始祖拳会」は、理事会によって日常の運営を行っている。その理事会メンバーは会長を含めて、すべてボランティアで兼務である^⑩。理事会の管轄の元に、訓練部では各地域の蔡李佛研修のことを指導、運営をしている。筆者が研究調査に行っている間に同訓練部を訪れ、夏休みコースの夜間訓練様子などを見学した。



写真6 小中学生の夜間稽古

このコースの主な参加者は小学生、中学生である。夏休み中に、小中学生を多くの宿題やコンピュータゲームなどから解放するために、蔡李佛は有効だとして保護者の高い評価を得ているという。同部はまた「武術醒獅隊」（蔡李佛獅子舞）という部署をもっており日常的に蔡李佛の基礎訓練として獅子舞の稽古をし、そして祭りや大会などイベントのある時には出場して日々の訓練の成果を披露する。

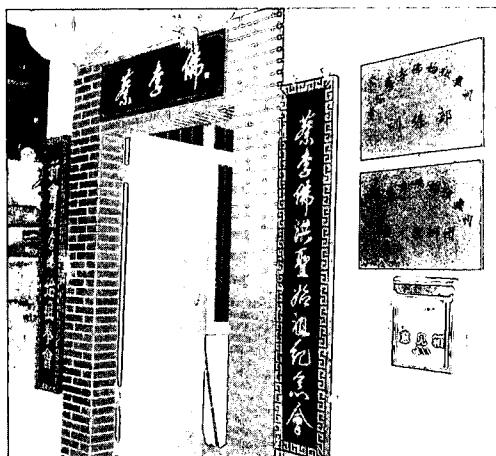


写真7 蔡李佛始祖拳会の訓練部及び「武術醒獅団」の所在地

それから同会は「技撃研究部」（格闘技研究部）という組織も擁しており、伝統武術の研究開発、各大会参加の技術指導などを担当しており、また日常的には同研究部の持っているジムを利用して社会人のスポーツ健康サロンとしても機能している。



写真8 蔡李佛始祖拳会の技撃研究部

新會蔡李佛始祖拳会には、また会員経営のレストランがある。蔡李佛の名称を使わせて

もらい、会員の親睦活動などにも寄与している。この中の一つは「蔡李佛山莊」である。この山莊は新会の郊外にあり、山に囲まれている貯水池の畔に作られている。隠居の地という雰囲気があり、将来では観光スポットの一つにもなりそうである。



写真9 蔡李佛始祖拳会会員経営のレストラン「蔡李佛山莊」

四、新会崖門蔡李佛武術学校

新会蔡李佛始祖拳会で展開している活動で、蔡李佛文化の継承と普及にもっとも有効な方策の一つとして注目すべきものは、小学校教育の場との連携である。筆者は研修調査の間、「新会崖門蔡李佛武術学校」を訪問した。この学校は、2007年に新会蔡李佛始祖拳会が新会区崖門鎮黄冲小学校の協力を得て設置したものである。黄冲小学校は、蔡李佛武術を体育の必修科目として設置し、週に三回蔡李佛の勉強をしている。武術の実技の他に武術文化や郷土文化なども結び付けて学んでいる。これは学校自身が同時に武術学校をも兼ねるというユニークな試みである^④。筆者の訪問はちょうど現地の夏休みの期間中である。現地の複数の小中学校の体育の先生は摂氏35度もある暑気の中で、時の北京オリンピックの番組中継の合間を縫って蔡李佛の稽古をしていた。

黄冲小学校はまた新会蔡李佛始祖拳会の協力の元で、新会崖門蔡李佛武術学校校本教材『蔡李佛武術基礎』という教科書を編纂し実際に教育の現場で使用している。教科書は三つの単元に分けられている。単元の一は、蔡李佛に関する基礎知識である。この単元においては、新会崖門蔡李佛武術学校の紹介、蔡李佛拳法の基礎知識、蔡李佛の歌などが盛り込まれている。単元二は、蔡李佛拳基礎訓練というもので、内容としては、蔡李佛の基礎馬歩、蔡李佛の主な拳の使い方、手の使い方、足の使い方などが入っている。単元三



写真 10 地域の体育教員の夏研修

は、蔡李佛初級団体拳というもので、集団演武用の拳法を紹介している^⑧。

この新会崖門黄冲小学校兼蔡李佛武術学校のことについて、社会的な評価は高かった。去年地元の新聞『江門日報』は、「蔡李佛拳は小中学校に普及するのはよいのか」と題する論評を掲載した。この論評の中で、「わが国の武術は長い歴史を持っており、その範囲は広くその内容は深い。これは国宝である。……武術は健康にもよいし、護身にも有効である。また修身養性的な効果がある。……ある小学校が武術特色教育を開始してから学生の精神的な面だけでなく身体的な面においても大いによくなり、学習成績も向上し、学校の秩序もよくなった」と賞賛した^⑨。

五、伝統文化の継承

蔡李佛は2008年に中国の「非物質文化遺産」として登録できたことは、中国の伝統文化、特に中国南方系の伝統的な身体文化の発掘、継承に非常に重要な意味を持つものと思う。このような伝統文化を持つ蔡李佛が社会に大きく評価された理由について、新会蔡李佛始祖拳会会長陳忠傑氏は、次のように論じている。

蔡李佛武術は文化的な深みを持つ伝統文化である。創設者の陳享氏は生涯武道の研鑽に捧げ、流派の命名に師匠の氏名を使う。これには弛まぬ努力をし、恩義を忘れないという美德が含まれている。また陳享氏の自らの武術活動は中国近代史の中の二大事件、つまりアヘン戦争、太平天国事件とも関連があり、これらの事件に際して陳氏は国家や民族といったものを自覚し、功夫を修練するものとしての大義を追い求めたのである。さらに蔡李佛は広東南拳の中でも自らの流派に関して年代順に脈絡をはっきりと示せるものである。そして、この流派ではすでに世界中に広がっているが、中国と外国の文化交流の重要な一

部となっている^⑧。

中国南方では武術一般を KUNG FU (功夫) と呼ぶ。「KUNG FU」はすでに国際社会の中に中国の武術文化の代名詞の一つとなっている。この KUNG FU という言葉は広東語の発音によるものであるが、功夫は、ある目標を目指して一心に精進努力することをいう。これが転じて中国南方では武術のことを指すようになっていく。中国武術の基本は結果としての「強さ」よりも鍛錬の精度、プロセスを重視する。KUNG FU (功夫) は弛まぬ鍛錬という意味合いで武術の代名詞になっている。KUNG FU の鍛錬のプロセスは同時に、生命を養い、最善な精神的、肉体的な境地を作り出すものと認識している。KUNG FU は鍛錬を通して人間と自然の調和、身体の内面と外面の調和を追求するものである。以上のような考え方は、もちろん南拳の一つとしての新会蔡李佛にも通じているものである。

蔡李佛秘伝の教本の一つに『行功秘要』があるが、その中にも功夫の追求するものとしては、養生のために、人間と自然の調和、身体の内面と外面の調和を追求するものであり、調和の中から結果としての功夫の強さが生まれてくるものであるとの認識を示している。

「拳術の主な効用は健康のためであり、病気を予防し寿命を延ばすことである。病氣予防や長寿のためには、身体を鍛えなければならない。功夫の練習によって身体はバランスがよくなり、偏りがなくなる。手足の動き、呼吸吐納などは自然に行い緊張牽強なところがないようにしなければならない。故に本流派で功夫を練習するとき、動作姿勢について、まずは開放的で緩やかに余分な力はいれないことを要求するのである」。また「隨合剛柔」という概念を立てて、「上下相隨、内外相合、剛柔相濟」という具体的な練習目標を示している。これはつまり体の上下の一致、内外の調和、剛柔の結合というものである。内面では精気、精神を追求し、外面では身、手、歩を鍛錬するというものである^⑨。

以上のような中国功夫の精神的、肉体的な鍛錬法というものが、新会蔡李佛にも脈々と受け継がれて、大きな功夫文化となって社会に貢献している。今日において蔡李佛が大いに評価される所以はそこにあると考える。

注：

1. 2008年6月8日、国务院（国发〔2008〕19号）公布，批准文化部确定的第二批国家级非物质文化遗产名录，蔡李佛拳获准为国家级非物质文化遗产项目，序号为808，编号项目IV36。
2. 习云太《中国武术史》人民体育出版社1985年p285-291参照
3. 「500武林高手参与蔡李佛拳赛事」2008-12-12《南方日报》
「据了解，蔡李佛拳历经172年传承至今，已发展成为广东省武术史上传播最广泛，弟子和爱好者遍

布全球五大洲超过 100 多个国家和地区，多达 300 万人的南拳主要拳种之一。」

4. 新会蔡李佛始祖拳会「陈享及蔡李佛拳简介」による。
5. 新会蔡李佛始祖拳会「蔡李佛始祖馆大事年纪」による。
6. 初代会長は區漢泉，現會長彭正庭が務める。
7. 會長に梁乃斌，主席に梁乃釗が選出された。
8. 蔡李佛泰斗 18 名：
中国当代十大杰出教练，国家八段武术家，原广东省武术队总教练 陈昌棉；
香港蔡李佛始祖陈享纪念馆总会创会会长，加拿大蔡李佛国术联合会主席 梁彪；
广东省武协副主席，国家八段武术家 董德强；
广东省武协副主席，国家七段武术家，广东省武协蔡李佛拳总会会长 彭正庭；
加拿大雄胜蔡李佛总会创会会长 黄虾；
加拿大多伦多康乐武馆馆长 陈郁；
香港蔡李佛始祖陈享纪念馆总会创会会长 陈达夫；
蔡李佛功夫国际联合会永远会长 胡苏；
美国蔡李佛拳总会会长 吴富亨；
蔡李佛始祖馆武术文化拓展基金会（海外）执行主席 黄子裕。
其他：
阮世武（台山），梁辉（香港），崔广源（佛山），江兴（香港），潘城（香港），吕逸荣（江门），陈焯荣（江门），谢炎顺（新加坡）。
9. 「广东省首届蔡李佛武术（国际）精英赛新会开锣—500 多名武术爱好者新会过招」2008-12-7《江门日报》
「本报讯 昨日上午，“庆祝蔡李佛拳申报中国非物质文化遗产成功暨广东省首届蔡李佛武术（国际）精英赛”开锣。来自国内外的 50 支代表队共 500 多名武术爱好者，将连续两天在蔡李佛拳发源地新会区切磋武艺。」
10. 現新会蔡李佛始祖拳会の陳忠傑會長は本務が新会区警察である。
11. 「新会崖门镇黄冲小学 蔡李佛弟子“秀”功夫」2008-10-18《江门日报》
「据介绍，去年，全国第一所蔡李佛武术学校在崖门镇黄冲小学挂牌成立后，该校以规范的教学手段培养出一批“文武双全”的新一代蔡李佛弟子。该校将学习蔡李佛武术编入课程表，编写了关于蔡李佛的乡村教材，还每周三天教学生蔡李佛武术，并与体育课结合起来。同时，该校还成立了 50 多人的蔡李佛武术队，10 多人的醒狮队，年龄最小的只有 8 岁，由当地蔡李佛武术传人任教。一年来，同学们通过认真练习，很快掌握了蔡李佛的一些基本套路。」
12. 陈忠杰主编《蔡李佛武术基础》新会蔡李佛始祖拳会，新会崖门镇黄冲小学，新会崖门蔡李佛武术学校 2008 年 5 月联合编印
13. 「蔡李佛拳可否在中小学校推广」2008-5-27《江门日报》
「武术运动极易开展，老少咸宜，投入很少。我国武术源远流长，博大精深，是“国宝”，是“武魂”，是优秀传统文化，极具中国民族文化的特征，而蔡李佛拳极具侨乡文化特征。武术可以强身健体，让人受益终身；武术可以防身御敌，扶危济困；武术可以见义勇为，伸张正义；武术还可以修身养性，培养刚毅果断，坚韧不拔的品格。我市在校的中小學生有 60 多万人，如果他们都能在学校得到良好的武术锻炼，学得几套拳法，常练不辍，练得体格健壮，武德高尚，对他们的成长无疑将大有裨益。笔者所在地的一间小学坚持开展武术特色教学后，学生的精神面貌大为改观，身体更健壮了，学习成绩上去了，学校的秩序也更好了。」

笔者认为，如果将蔡李佛拳在中小学校推广，对传承武术必是一件好事。」

14. 陈忠杰「蔡李佛拳派的源流简述」参照

「纪念蔡李佛始祖陈享诞辰 200 周年暨蔡李佛创立 170 周年“蔡李佛武术文化研讨会”」2006 年 12 月 7 日

15. 【行功秘要】新会蔡李佛始祖拳会资料

(一) 初基先導，拳之為用也，主要目的為強身健體，卻病延年，進而自衛禦侮，欲求卻病延年，須先將四肢百骸，加以鍛煉，使發育平均，無所偏重，舉手，投足，呼吸，吐納均須純自然，毫無緊張牽強，而影響健康，故本門練習拳式時，動作姿式，先求開展，自然放鬆，不尚拙力。

(二) 隨合剛柔，何謂隨，合，剛，柔。隨者上下相隨也；合者，內外相合也；剛者，剛柔相濟也。何謂上下相隨。腰腿靈活，上下一致之謂。內外相合者，內而精氣，神，外而身，手，步，合而為一。依照初基先導之方法，練習馬步拳式，嫻熟之後，進而第二階段，始能練習相隨，相合，相濟之法。

※本研究は平成 20 年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である。江門，新会での調査において，陳志松部長，文錫彦副局長，陳忠傑会長，徐國強秘書長，馮志興理事長，阮召榮副總教練，陳振業監督，黃健和副校長など各先生のご歓待，ご指導をいただき，心より感謝申し上げます。